

稀代の陰陽師・安倍晴明の墓は複数ある。その力を利用されるのを恐れたために、本当の墓所がどこか判らないようにするのが目的とも言われるが、晴明神社の認める公式の墓所は、嵐山の観光地のはずれにある。

元々の墓所は天龍寺塔頭・寿寧院境内(現在は天龍寺山内に移転)にあったが、荒廃していたため、晴明神社がこの墓所を買収して、昭和47年(1972)に、墓域を整備して新しい墓を建立した。

この安倍晴明の墓所は、室町前期の「応永釣命絵図」に描かれていることから、少なくとも室町時代には、この地に塚として祀られていたと考えられる。

陰陽師・安倍晴明は平安時代のヒーローとして根強い人気がある。

夢枕獏原作、野村萬斎主演の映画「陰陽師」では若き安倍晴明が大活躍する。安倍晴明は平安中期に実在した人物で、陰陽師であったことは間違いない。では本当の安倍晴明はどんな人物であったのか。講談社選書「陰陽道(鈴木一馨著)」を参考に、安倍晴明の素顔を考えてみたい。

## 安倍晴明を巡る2つの説話

現在、小説やマンガで描かれる安倍晴明は、「急急如律令」と書かれたお札を飛ばし、真言を唱えて鬼神や妖怪と対決する。この晴明像は鎌倉時代の、「宇治拾遺物語」の説話に、超能力を持った不思議な人物として描かれているのである。

『ある日、晴明が広沢の寛朝僧正のところまで面会を待つ間に、若い公達や僧侶が晴明に式神を使って人を殺せるかと尋ねたところ、「簡単に殺せるが、蘇生させるのが容易ではないので、簡単にはしない」と答えた。そして傍らの草の葉を摘みとって呪文を唱えながら、庭に居た蛙のほうに投げかけた。すると投げかけた葉がその蛙の上に乗ったと思った瞬間、蛙はペシャンと潰れてしまった。僧たちはこれを見て、恐れおののいた。』

『ある日、晴明の家に、二人の童子を連れた老僧が訪ねてきて、「自分は播磨の国から、陰陽の術を習いたいと思ってやってきた」と言った。晴明は老僧が自分を試しにやって来た陰陽師で、連れている童子たちは式神だと見抜いて、袖の内に印を結び、密かに呪文を唱え、童子たちを隠してしまった。そして老僧には「今日は忙しいから日を改めてくるように」



と言った。老僧はしかたなく帰っていったが、暫くして戻ってきて、「二人の童子を返してもらいたい」と言うと、晴明は「他の人なら試してもいいが、自分にはいけない」と言いながら、袖の内で印を結び、呪文を唱えた。すると二人の童子が老僧の元に駆け寄ってきた。清明は「式神を使うことは容易いが、他人の式神を使うことは簡単ではない」と言った。そして、この老僧を弟子にした。』

ここで描かれる晴明、あるいは陰陽師は、袋手の袖の内で印を結び、呪文を唱え、式神という自由に空を飛んだり姿を変えたりする妖怪変化を操る術を使う。

宇治拾遺物語は鎌倉時代に成立した説話集だから晴明が生きていた時代から2000年は経っているが、そのころ既に晴明は伝奇的な物語の中の人物だったのである。では、実際の晴明はどうだったのか。

## 史実に見る安部晴明の謎

安部晴明の生まれは、実のところ全く分かっていない。

2年ほど前に和泉の信太山で、安部晴明の父親は学者の安部保名で、母親は「葛の葉」という名の狐であると細居さんが説明していたが、あれは単なる伝説で史実ではない。それでは誰の子かというによく分からない。よく分からないが、多分、古代の名族「阿部氏」の一族で、母親は「加茂氏」から出ている。この加茂氏は陰陽師の家柄で、晴明も幼少のころから陰陽道を学んでいたのであろう。

史実の安部晴明はどうであったのか、平安時代の貴族が残した日記や史書には晴明の記事がいくつかあり、そこから晴明の姿が<sup>うかが</sup>仄い知ることが出来る。

安部晴明の最も若い姿は、961年に陰陽寮の「天文得業生」であったという記述である。得業生はいわば特待生のようなもので、「延喜式」では定員二人とあるから優秀だったのである。晴明は1005年に85歳で亡くなっているから、921年の生まれで、若いといってもこの時は41歳、平安時代の役人は中年になっても、まだ修行の身だったのである。

次の記事は967年の6月に「陰陽師」安部晴明が、新たに即位した冷泉天皇のまつりごとはじめ政始の日の日時勸文（日取り決め？）を行なったことが記載されており、この時晴明は47歳であった。

さらに972年（52歳）の時の別の記事には、この時晴明は「天文博士」であったと記されており、986年（66歳）には「天文博士・正五位下」であったとあるから、晴明は15年近く天文博士の職にあったことになる。

晴明は一生涯、陰陽寮という役所で過ごした役人だが、実はこの略暦の中に、晴明伝説を生んだ秘密が隠されている。それを考える前に、今の安部内閣には存在しない陰陽寮が、どのような役所だったのかを見ておかなければならない。

## 陰陽寮はと古代のまつりごと

陰陽寮とは「陰陽道」を研究する機関である。それは説話に見られる妖しげな呪術や怪異の類ではなく、自然や世の中の現象を生成させる法則を読み解こうとする立派な学問である。「天変地異」も「怪異現象」も全て自然の法則によって起きるもので、その法則を知ることは為政者と国家にとって重要なことだった。陰陽寮は、「天意」を図り、天皇に伝えることを職務として、律令で中務省の中に設置された役所で、陰陽師は国家の役人だったのである。

陰陽道は、古代中国で儒教や道教から発展した民間信仰の体系で、それは「陰陽」であり、「五行説」であり、「風水」であり、「気」であり、「天文」であり、「暦学」であり、「易占学」であり、この小文で扱うには難解で複雑で煩瑣で長大にすぎるが、要するに、陰陽寮の役人はそれらの技術官僚だった。

この陰陽寮には3つの専門分野に分かれていて、天文を扱う「天文博士」、易や占いを扱う「陰陽博士」、暦を扱う「暦博士」に分かれていた。

陰陽師というのは、「陰陽寮に所属し陰陽五行の思想に基づいた陰陽道によって占筮及び地相などを職掌とする」技術官僚ということになる。日本書紀の天武13年に陰陽師という言葉がみられる。これは飛鳥浄ヶ原に居た天武天皇が新たな都の候補地を探しているところで

『広瀬王と大伴連安麻呂、及び判官（事務官）と録事（書記官）それから陰陽師と工匠などを畿内に遣わし、都をつくるべき地を視占させた』

確かに陰陽師の仕事は、国家の大事を決める重要な仕事だったのであろう。

## 安部晴明はここにいる

いよいよ、安部晴明の正体が明かされる時だが、前記の晴明の略伝から我々はあることに気付かされる。若いころは「天文得業生」であり、52歳の時は「天文博士」と呼ばれた晴明の専門は天文であって、陰陽道が専門ではなかったのではないかな。確かに、陰陽寮の技官であるから、陰陽道にも熟知していたことは想像出来るが、若い頃は天文を専門とする勤勉で目立たない官僚だったのではないかな。

さらに不思議なことは、66歳の時の記事で「天文博士・正五位下」になっていることである。五位以上は貴族で、延喜式によると陰陽寮の長官である「陰陽頭」の位は「従五位下」と既定されているから、陰陽寮の「博士」という一介の官僚であった安部晴明は、長官よりも高位の貴族になっていたということになる。



これらの事実から見てくることは、若いころは勤勉で優秀な天文を専門とする技官に過ぎなかった晴明は、40代後半には陰陽寮のあらゆる分野の学問、技術で秀でた存在になり、50代から60代半ばに、地位と権力を併せ持つ「陰陽寮のドン」的な存在に成りあがったのではないだろうか。そこにはおそらく、時の廟堂の権力争いと関わるのではないか。そして、安部晴明の晩年は平安朝最大の政治家であり権謀家であった、藤原道長の隆盛期と重なるのである。

986年	66歳、20歳	花山天皇退位事件、道長派が廟堂内で権力を得る。
990年	70歳、24歳	道長は権大納言に抜擢される。
996年	76歳、30歳	対立候補の藤原伊周失脚、道長が藤原氏の長者となり名実ともに廟堂の第一人者になる。
999年	79歳、33歳	長女彰子が一条天皇に入内、翌年皇后になる。
1008年	42歳	彰子が敦成親王（後の後一条天皇）を出産。「望月の」の歌のように道長の権勢は磐石に （年齢の左は安部晴明、右は藤原道長）

986年の花山天皇退位事件は、前回の「天文の歴史」で書いたが、これは安部晴明が「天子の交代を示す星が現れた」として、花山天皇を退位に追い込む事件だが、これにより一条天皇が即位し、道長の父親の兼家は摂政になる。この時道長はまだ20歳で、晴明は66歳。しかしそれから晴明が死ぬまでの20年間は、道長があらゆる陰謀と術策を廻らして、廟堂の最高権力者に申し上がっていくときである。明晰な道長がこの「赤」を「白」と言いくるめられる力を持った「陰陽寮のドン」の力を利用したと想像するのは、陰陽師を種にした小説やドラマの見過ぎだろうか。もっともこれらのドラマで道長のブレンとして描かれる晴明は、たいがい、同じ年頃の若者で明らかに史実とは違うが。

晴明が死んだ時は道長は45歳前後、まさに「望月の欠けたることの無かりせば」の時を迎えていたはずである。若き日から研鑽を重ねた天文博士の晴明にとって、月の満ち欠けを左右することなど、容易なことであったに違いない。

資料 講談社選書 陰陽道（鈴木一馨著）

